

今年始めの乾季は例年のない暑さでした。カンパラでは日中最高気温が30度を超えるのは稀なのですが、今年は連日30度を超えました。3月に入り日中から雲が広がり雨が降り出しました。最近は気候変動の影響か雨季と乾季の境目が明確でないことが多いと聞きました。今年は今のところ明確に雨季が始まっているようです。

## 1、日本祭りの開催

3月16日カンパラ市内のインターナショナル・フレンチ・スクールをお借りして毎年恒例となっている日本祭(英名:Uganda-Japan Festival)が開催されました。雨季が始まったので、午前中は雨模様で出足が心配されましたが、午後には天気が回復し数多くの家族連れが会場を訪れました。

和食の人気は今や世界中で高まっていますが、ウガンダも例外ではありません。市内の複数の和食レストランが出店し和食が提供されました。また、それ以外にも当地で活躍する日本企業や在留邦人等も出展し会場を盛り上げました。

文化の紹介ではウガンダの空手連盟、柔道連盟、将棋同好会がデモンストレーションを実施。生け花、茶道もボランティアの方々がデモンストレーションを行いました。日本人補習校、あしながレインボーハウスの子どもたちが元気に日本の歌を披露しました。

今回は日本風ののど自慢が実施されました。ボランティアのバンドも日本の歌や演奏を披露しました。

来場者も在留邦人の方、在留外国人の方、地元ウガンダの方など国籍、年齢にかかわらず多くの参加者を得ました。国際色豊かなイベントとして地元に着したイベントとなっています。



[会場の様子]



[あしながの子どもたちによるパフォーマンス]

## 2、インフラ案件の進展

今月は大型のインフラ案件などが多くの進捗を見ました。

### (1)カンパラ立体交差建設・道路改良事業(カンパラ・フライオーバー、有償資金協力事業)

今年1月のコラムで立体交差事業の完成をお伝えしました。3月5日、ムセベニ大統領のご臨席を得て正式な完成・引き渡し式が執り行われました。ナツバンジャ首相、カンパラ首都圏省大臣など主要閣僚も出席。ウガンダが如何にこのプロジェクトの完成を待ちわびていたかがよくわかりました。

私は挨拶の中で、このプロジェクトが単にカンパラ市内の道路事情を良くするという以上の経済効果があることを紹介しました。具体的には6年に及ぶ工事期間中延べ約70万人の雇用を生み出したことです。さらに工事の期間中100名を超えるウガンダのエンジニアの方が日本に渡りインフラ構築の技術を学びました。これらエンジニアは今後ウガンダ国内のインフラ整備にその能力を発揮し、さらに後進を育てることが期待されます。これら技術者の代表が式典ではムセベニ大統領に直接紹介される場面もありました。

日本が提供する質の高いインフラの実例がまた1つアフリカの地に加わることとなりました。



[ウガンダ大統領、首相との記念写真]



[ムセベニ大統領も臨席]

### (2)リサイクル草の根無償資金協力による救急車、消防車の寄贈

カンパラ・フライオーバーの引き渡し式が行われた同日の3月5日、日本消防協会からリサイクル草の根無償資金協力のスキームを活用してウガンダに輸送されてきた日本の中古救急車10台、消防車5台を保健省及び消防局に引き渡すことができました。

消防車や救急車はその機能から特殊な車両であり調達は容易ではありません。現状では救急車が非常に少ない中で、一般の車両や場合によってはバイクで救急患者を搬送しているという実態があります。今回引き渡された車両は、保健省と消防局の管理の下ウガンダ全土へ展開され、各地で活躍することになります。

ウガンダ全土の必要数からはまだまだ不足しています。今回の寄贈により緊急医療の能力が少しでも高まることを期待したいと思います。

ただ日本の中古車であるためサイレン音も日本のものと同じです。救急車は進行方向に向かって緊急車両が通ることや右折左折をスピーカーで知らせますが、これらは日本語のままです。緊急搬送という機能の発揮に何ら問題はないと思います。



[アチエン保健大臣との記念写真]



[供与された救急車と消防車]

(3)カルマ橋の架け替え(「カルマ橋架け替え計画」(新カルマ橋)、無償資金協力事業)

3月25日、ウガンダのカサイジャ財務大臣との間で、私はこの資金協力に関する交換公文に署名しました。

カルマ橋は首都カンパラと北部の中核都市であるグルを結ぶ幹線道路にあり、ナイル川を渡る橋です。現在の橋は1964年にかけてられましたが、老朽化が激しくなり、通行規制がかかる事態にもなっています。ウガンダは2019年8月に開催された第7回アフリカ開発会議(TICAD7)に来日したムセベニ大統領が当時の安倍総理に直接要請をしました。今回、無償資金協力を正式に決定しました。

カルマ橋はウガンダからさらに内陸のコンゴ民主共和国、南スーダンなどを結ぶ交通の要衝となっています。ナイル川はビクトリア湖からウガンダを南北に流れていますが流れが急な場所も多く、橋がなければ約200キロも迂回しなければなりません。また現状では陸上輸送が東部アフリカの物流のほとんどを担っています。したがって、この橋は単にウガンダ国内の物流、人流の助けとなるばかりではなく東部アフリカ全体を結ぶ要所でもあるのです。この橋はまさしく待ったなしの案件です。署名式の際、カサイジャ大臣は今回の案件は現在かかっている橋を架け替えるのではなく60メートルほど上流に全く新しい橋をかけるものであり現在の橋の補修に加え利便性は飛躍的に向上するであろうと報道陣に説明されていました。今後は手続きを迅速に進めて質の高いインフラ建設を実現したいと思います。



[現在のカルマ橋]



[新カルマ橋: 完成予想図]



[交換公文の署名]



[交換公文の交換]

#### (4)アタリ流域地域灌漑施設整備計画(無償資金協力事業) 起工式

温暖な気候と豊かな水資源に恵まれたウガンダは農業が基幹産業です。人口の7割は何らかの形で農業に携わっていると言われています。水資源は豊富にあるものの、それを耕作地域に効率的に引いてくる灌漑施設の普及はまだまだ遅れています。ウガンダ政府は近代的な灌漑技術を導入し、農業開発を効率化し生産性の向上を目指しています。ウガンダ東部に位置するアタリ川流域地域は水資源に恵まれ、米栽培も盛んですが、灌漑施設の普及が残念ながら追いついていません。わが国は2018年に無償資金協力の契約を行いました。今回灌漑施設の着工に至り、3月27日に行われた起工式に私も参加しました。

農業灌漑について2014年から2016年にかけてJICAが開発調査を行いました。今回のプロジェクトはその調査結果に基づき選ばれた場所です。ウガンダ政府はこの調査に基づいてアタリ以外でも灌漑事業を進めています。

起工式に出席された農業大臣は今回のプロジェクトで具体的な成果を挙げたいと強調していました。現場はアタリ川を挟んで2つの地域にまたがっています。今回の灌漑事業により地域住民同士の協力が進むことも期待されています。

ウガンダの農業を支援する国や国際機関は多いですが、このように灌漑施設にまで手が及ぶのは日本だけであるとウガンダ農業畜産漁業省は日本の支援を高く評価していたのが印象的でした。



【広大な農地】



【農業大臣、地元国会議員とともに】



【事務所前にて】